

保育者養成校の学生による児童文化財実践の効果と意義 － 学生による幼稚園実習での人形を活用した実践を通して －

熊田 武司
岐阜聖徳学園大学短期大学部

The effect and significance of children's cultural property practice by students of a pre-school teacher training school Practical practice and the use of puppets by kindergarten children

Takeshi KUMADA

Abstract

Puppet shows can play a part in enriching children's sensibilities. In order for students to use puppets as children's cultural properties, it is urgent to understand the interests of children with respect to puppets and the influence of puppets on children.

We offered opportunities to practice using puppets. Two studies were conducted to investigate the effects of puppets. The following three results were obtained.

1. Children are interested in the concrete appearance of puppets.
2. Puppets influence children
3. An awareness of what is necessary to derive the effect of puppets was gained.

It became clear that practicing using puppets leads to a student's skill improvement.

Key Words : puppet, puppet show, children's cultural properties

I. はじめに

日本において人形劇を最初に保育に導入したのは、倉橋惣三である。それについて、斉藤(1989)¹⁾は「東京女子高等師範学校附属幼稚園の主事となった倉橋惣三は、大正8年暮れから11年3月まで、文部省の在外研究員としてアメリカ・ヨーロッパの各国を訪問。それぞれの国で幼稚園や大学など教育施設を視察してまわるが、同時に多くの人形劇にも出会って日本に戻った」「倉橋は帰国後すぐに幼稚園主事に復帰し、保姆たちとともに、「お茶の水人形座」と名付け、園児たちに人形劇を見せるようになったのが大正12年だった」と述べている。

金城(2009)²⁾は「倉橋が導入した人形劇は、現代の幼稚園教育においても実践されている。幼稚園教育の現場では保育者によって人形の形態や活用方法などに新たな工夫も施され活用されている。このことは、倉橋が大正期に幼稚園教育に導入した人形劇が、現代の幼児教育においても幼児に対する教育的効果が認識され受容されている証左である」と述べている。

現行の保育所保育指針には、保育の目標として「様々な体験を通して、豊かな感性を育て、創造性の芽生えを培うこと」とあるが、1900年代前半から行われている保育実践からもわかるように、人形劇は幼児にとって生活経験を拡大できる総合的な体験の一つであると考えられる。したがって、保育の目標とされている「豊かな感性を育て、創造性の芽生えを培う」ことの一翼を担うことができると考えられる。

II. 問題の所在と研究の目的

保育における児童文化財のうち、絵本など児童文学作品を使用した実践の効果についての研究はなされているが、児童文化財である人形劇や人形(puppet)を使用した実践の効果についての研究は非常に少ないのが現状である。

熊田(2010)³⁾の調査により、人形劇および人形を使用した実践について、保育士は保育の中で必要であることを認識していることが明らかにされた。また、「子どもの集中力を高めることができる」「子ど

もと保育士との信頼関係を築くことができる」などの効果があることが明らかにされた。

学生が人形を操作したり、人形劇を制作したりするためには、指導者の技術や指導法は大切なことである。しかし、その前提として、子どもが人形に対してどのような興味を抱くのか、人形は子どもに対してどのような影響を与えるのかを学生が理解することが必要であると考えられる。

本研究では、人形劇の保育における効果に関する先行研究をふまえ、人形に対する保育者の意識を調査する。次に、学生に子どもに対して人形を使った実践をする機会を提供する。この実践により、人形及び人形劇に対する学生の意識がどのように変化し、それが学生の保育実践力のスキルアップにつながるのかを明らかにすることが目的である。

1. 調査方法

(1) 調査の視点

人形劇に対する保育者の意識を知り、学生が人形を使用した保育実践を実施することにより、学生の人形及び人形劇に対する意識がどのように変化するかを知るために、調査①～②を実施する。

(2) 調査の概要

調査①：保育で人形を使用する意義

ア 期間と対象

2014年～2016年 S 大学短期大学部学生の幼稚園実習(11月)の期間 計 3 回
実習先の保育者に対してアンケート調査を実施

イ 調査件数

2014年	101人	71園 (公立25園、私立46園)
2015年	108人	80園 (公立28園、私立52園)
2016年	80人	66園 (公立19園、私立50園)

調査②：学生が人形を使った実践

ア 期間と対象

2014年～2016年 S 大学短期大学部学生の幼稚園実習(11月)の期間 計 3 回
人形を使った実践を行った学生が結果を記録用紙に記録

イ 調査件数

2014年	101人 (女 99人、男2人)
2015年	108人 (女103人、男5人)
2016年	80人 (女 77人、男3人)

ウ 実践の目的

学生は、この時点では人形の操作について十分な学修ができていないため、次の3点を体験することを重視する。

- ・子どもの前で人形を使って演じてみる
- ・子どもに対する人形の影響について知る
- ・人形に対する子どもたちの反応を知る

エ 実践の方法

学生に対して、実践方法について具体的に主として次の4点の例を提示した。

- ・自己紹介で人形を使う
- ・絵本の読み聞かせなどの導入に人形を使う
- ・人形を使って簡単な物語を演じる
- ・自由遊びの中で子どもたちと一緒に人形で遊ぶ

(3) 倫理的配慮

調査①については実習園への依頼文書で、調査②については学生に対して口頭にて、結果を研究資料として使用することを伝え、その上で回答を得た。

III. 結果と考察

1. 調査① 保育で人形を使用する意義の結果と考察

S 大学短期大学部の学生が11月に幼稚園実習を行う機会に合わせ、実習先の保育者に対してアンケート調査を実施した。

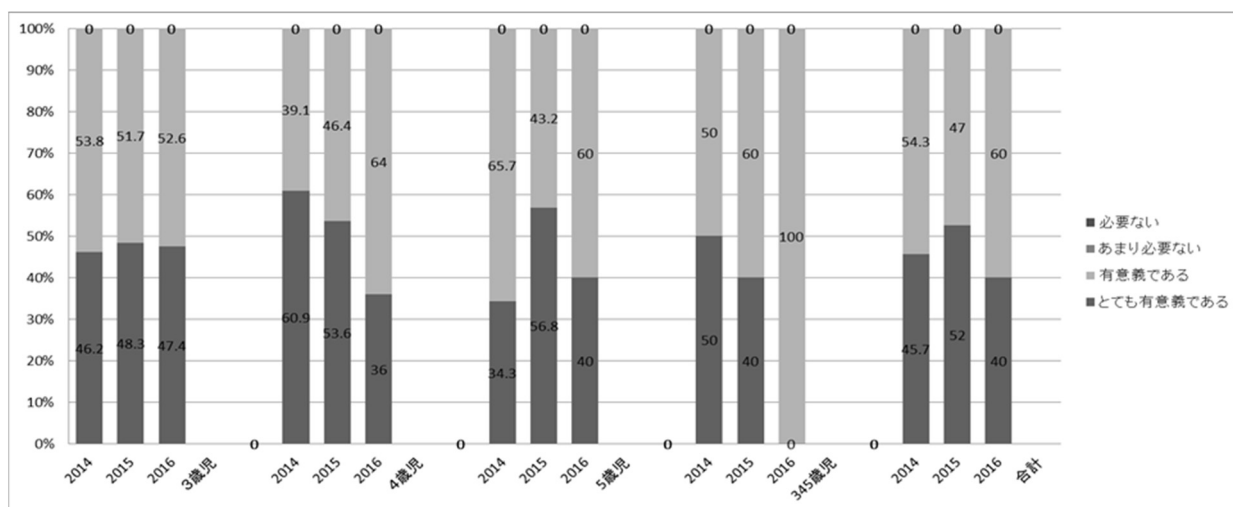


図1 保育で人形を使用する意義

2014年は、調査対象101人に対して有効回答92人、無回答9人であった。有効回答の内訳は、3歳児クラス26人、4歳児クラス23人、5歳児クラス35人、3～5歳児合同8人である。

2015年は、調査対象108人に対して有効回答99人、無回答9人であった。有効回答の内訳は、3歳児クラス29人、4歳児クラス28人、5歳児クラス37人、3～5歳児合同5人である。

2016年は、調査対象80人に対して有効回答75人、無回答5人であった。有効回答の内訳は、3歳児クラス19人、4歳児クラス25人、5歳児クラス30人、3～5歳児合同1人である。

この調査は、「保育で人形を使用することについてどの様にお考えですか」という質問に対して、「とても有意義である」「有意義である」「あまり必要ない」「必要ない」の4択で回答を得た。結果は図1のとおり、いずれの年・年齢クラスにおいても「とても有意義である」「有意義である」の合計が100%である。

したがって、熊田(2010)³⁾の保育士に対する調査と同様に、幼稚園においても、保育において人形を使用することは有意義であると考えられていることが明らかとなった。

2. 調査② 学生による人形を使った実践の結果と考察

S大学短期大学の学生が11月に幼稚園実習を行う機会に合わせ、学生が子どもに対して人形を使った実践を実施し、その結果を記録用紙に記録した。

2014年は、調査対象101人に対して有効回答97人、無回答4人であった。実践したクラスの内訳は、3歳児クラス28人、4歳児クラス25人、5歳児クラス36人、3～5歳児合同8人である。2015年は、調査対象108人に対して有効回答103人、無回答5人であった。実践したクラスの内訳は、3歳児クラス31人、4歳児クラス29人、5歳児クラス38人、3～5歳児合同5人である。2016年は、調査対象80人に対して有効回答73人、無回答7人であった。実践したクラスの内訳は、3歳児クラス19人、4歳児クラス25人、5歳児クラス27人、3～5歳児合同2人である。

学生の実践記録を基に、その事例を抜粋して考察を加えるとともに、子どもに対して人形を使った実践を行うことにより、人形に対する学生の意識がどのように変化したのかを明らかにする。

【事例1】A幼稚園 3歳児 20人 使用人形：片手遣い人形⁴⁾

日時：2014年11月12日（水）14:00～

目的：子どもの興味を引く。静かに絵本を見る体勢を作る。

実践内容と感想：

学 生「絵本を読む前に今日はお友だち連れてきたから呼んでもいいかな？みんなで「おーい」って呼んでくれる？」

子ども：人形が出てくると「わー」と言って人形を触りたがる子もいた。

人 形「皆さんこんにちは。僕はパンダのパンちゃんです。みんなは今、何をしようとしてたの？」

子ども：「絵本」と言う。人形を引っぱったりする子に人形が「痛いよ、痛いよ」と言うと優しく頭をなでてくれたり、握手したりした。(a)

人形「僕は先生の隣に座って、誰が一番かっこいいポーズでお話聞けるか見てよかな」

子ども：いい姿勢になり、静かになる。(b)

人形「Kちゃんかっこいいな。花まるだね。じゃあ、先生お願いします。」

学生「はい。じゃあパンちゃん、ここで見てね。」(人形をイスに座らせる)

実際に子どもの前で人形を使うことは初めてでしたが、人形を見せたときの子どもたちの目の輝きがとても印象的(c)で嬉しかった。今回は絵本の読み聞かせの導入に使用しましたが、人形に触りたがって前に出てきてしまう子どもがいたので、そのような子どもへの言葉掛けのレパートリーを増やさなければならないと思いました。実践した次の日から「今日は、お友だちは？」と言ってくれる子が多く、「今日はまだ寝ていたから連れてこれなかったの」と言うと、「え～！じゃあ明日は来る？」と言ってすごく楽しみにしていてくれて嬉しかった。その後も人形を使用しましたが、興味津々で、人形一つでこれほどにも子どもを笑顔にすることができるなんて素敵なこと(d)だと感じました。

事例1は、絵本を読むための導入として人形を使用した実践である。

子どもにはアニミズムがあり、(a)のように人形を友達のように感じ、人形に対して親密感を抱いて行動する。また、(b)のように学生ではなく人形が話すことで、その話をしっかり聞き行動することができる。

(a)(b)の子どもの行動などを見て、事例1の学生は、(c)(d)で感じているように、人形の効果として人形が子どもに対して与える影響について理解した。

【事例2】C幼稚園 3歳児 17人 使用人形：片手遣い人形

日時：2015年11月19日(木)

目的：子どもたちに人形劇の楽しさを知ってもらう。人形劇を通して、話を聞く楽しさを味わってもらう。人形劇を通して、早寝早起きの大切さを伝える。

実践の内容と感想：

学生：ウサギと猫の人形を遣い、「なかよし」の脚本で一人二役をする。

人形：挨拶の途中で猫は寝てしまう。猫は夜テレビを見ていて寝不足。そんな猫に早寝早起きをして元気に遊ぼうねと伝える。

子ども：前日にウサギを見ていたので、「うさ子ちゃん」と歓声が上がり興味を示す。

子ども：新しいキャラクターの猫が登場すると、さらに歓声が上がり、目がキラキラと輝く。(e)

子ども：挨拶の途中で猫が寝てしまうと子どもから笑いが何度も起きる。(f)

子ども：絵本と違い人形と会話をしようとする。(g)

子ども：劇が終わると、人形に触りたい、使ってみたいと興味を持って集まってきた。

人形を見た瞬間に子どもの目はキラキラ輝き、すぐに人形に引き込まれていました。絵本と違い自分に話しかけてくれる人形は、子どもたちにとってとても新鮮で魅力的なもの(h)だと感じ、改めて人形劇の楽しさを味わうことができた。(i)一人二役のため、キャラクター毎に声を変えたりすることがとても大変で難しかった。キャラクターの性格をしっかりと決めることの大切さを知った。(j)声のトーンや早さを考えながら行うことができなかった。途中、人形が下がってしまい後方の子には見えづらくなってしまい練習不足を感じたが、流れだけを決めておき子どもたちの反応によってセリフや話を臨機応変に対応すること(k)ができ、子どもたちの笑い声や笑顔を見ることができて良かった。

事例2は、片手遣い人形2体を使用し人形劇を演じた実践である。

人形の操作は未熟であり、練習時間も少なかったと思われるが、人形の動きによる(e)(f)のような子ども達の反応を捉える事ができている。(g)のような子どもの行動は、「なかよし」という演目を考えると、内言が言葉として噴出したものであり、(k)のように対応することで子ども達の内言をさらに学生が引き出したものと考えられる。

事例2の学生は、人形の効果として(e)(f)(g)のような人形に対する子ども達の反応を知り、(h)のように人形が子どもに対して与える影響について理解した。また、二役するために必要な役作りについて

(i)のように気づくことができた。さらに学生自身も、(j)で書いているように人形劇の楽しさを感じる事ができている。

【事例3】E幼稚園 4歳児 23人 使用人形：片手遣い人形

日時：2016年11月16日（水）13:07～

目的：部分実習でスクラッチのきつね作りの説明をする際、大切な部分の説明に人形を使い、子ども達の興味を引いて説明する。

実践の内容と感想：

学 生：絵本「くれよんのくろくん」を読む

学 生：くれよんが描いた絵を真っ黒に塗りつぶしてしまった場面で人形を登場させる。

子ども：人形に興味を示す。「うさぎさんだー」と言う。

人 形：「黒く塗りつぶしてしまってもいいのかな」と子ども達に聞く。

子ども：「真っ黒になってもいいんだよ」と言う。

学 生：「どうなるのかな」と問いかける。

子ども：「色が出てくるんだよ」と言い、絵本に興味を示す。

指導案では、大切な部分の説明をする時に、絵本を読むのを中断して人形を登場させ、人形が大切な部分を詳しく説明する予定だったが、緊張してしまい人形を登場させることができなかった。(1)そのため、人形は少しの言葉しか話せず、子ども達の印象に人形のことは全然残っていないと感じた。(m)子ども達が「うさぎさんだー」と言って興味を示してくれたのに、全然登場させることができず、恥ずかしくてウサギに成り切ることもできなかった。これから人形を使うときや人形劇発表会では、子ども達の印象に残るような人形の使い方をしたい。また、恥ずかしさを捨てて、その役に成り切ることを大切にしていかなければいけないと思った。(n)

事例3は、主活動の導入として活動に関する絵本を読み、人形を使用して主活動の説明をしようとした実践である。

事例3の学生は、(1)(m)にあるように初めての責任実習による緊張と練習不足によって、人形に対する子ども達の反応を捉え、人形の効果を知るという体験をするには至っていない。学生にとっては最初の実習であることもあり、緊張する活動が重ならないようにするための指導や実践方法の具体的な提示が、今後は必要であると考えられる。

事例3の学生は、人形の効果を体験することはできなかったが、その失敗体験により、(n)に書かれているように人形の効果を引き出すために必要なことに気づくことができた。

【事例4】G幼稚園 3～5歳児 37人 使用人形：表情人形⁵⁾

日時：2016年11月8日（火）16:00～

目的：子どもの前で人形を使って演じてみる。子どもに対する人形が持つ魅力を知る。人形に対する子ども達の反応を知る。

実践内容と感想：

人 形：子ども達の前に出て挨拶する。

子ども：「わぁ」「何じゃありゃ」と人形に興味を示す。

人 形：音楽会の練習の元気な歌声が聞こえたから幼稚園にやってきたと伝える。

子ども：「名前はなあに」と聞く。

人 形：「なんだと思う」と子ども達に聞く。

子ども：思い思いに答えを叫ぶ。

人 形：「僕はロボのジャッキーです」と自己紹介をする。

人 形：「みんなで僕の名前呼んでみて。せーの」

子ども：みんなで名前を呼ぶ。

人 形：元気に呼んでもらえて嬉しいと伝える。

子ども：集中して人形を見ている。

人 形：音楽会の練習を頑張れるよう応援する。

人形：友だちになれて嬉しいこと、また遊びに来ることを伝え「バイバイ」と手を振って退場する。

子ども：「バイバイ」と手を振る。

最初から最後まで、子ども達の視線が人形へ集中していて驚いた。(o)子ども達が人形に興味を持ってきて、終わった後に「ジャッキーはどこへ行ったの」と聞いてきたり、「また会いたい」と言ってきたりしてすごくやりがいを感じた。演技については、もっと声色を変えるとよりキャラクターが出ると思った。(p)また、広いスペースだったので、もっと動きをつけた方が子ども達も楽しめると思った。

G幼稚園 5歳児 25人 使用人形：表情人形 日時：2016年11月9日（水）12:35～

実践内容と感想：

人形：登場して挨拶する。

子ども：「あっ、ジャッキー」挨拶を返す。

人形：昔の冒険の話をするという。

学生：「ブレーメンの音楽隊」を読む。

人形：「聞いてくれてありがとう」と言い、「また遊びに来る」と言って帰る。

昨日よりかなり声色を変化させたつもりだったけど、つもりでは子どもたちに伝わらないことがわかった。(q)子ども達は、「また会いたい」「音楽会の練習頑張ったら来てくれる」などたくさん声を掛けてくれた。もっと練習をして、会話したり、遊んだりできるようにしたい。(r)

日時：2016年11月11日（金）12:40～

実践内容と感想：

人形：登場して挨拶する。

子ども：初めて会う子に、他の子がジャッキーの名前を教える。「ジャッキーは何歳」

人形：「何歳だと思う」など会話する。

学生：ジャッキーの友だちのカニの話をすると言って「さるかに合戦」を読む。

人形：「また遊びに来る」と言って帰る。

人形で話す時も、紙芝居を読む時も子ども達との言葉のやりとりを大切にすることができた。質問を投げかけたり、質問されたりと、人形をとおしてコミュニケーションができるようになった。(s) もっと動きをつけると良いと思うので、言葉に会う人形の動きを考えながら実践したい。(t)

日時：2016年11月15日（火）12:30～

実践内容と感想：

人形：「今日はみんなとゲームがしたい」と言って、「しりとりをしよう」と提案する。(u)

子ども：順番にしりとりをする。

人形：「また一緒にゲームしようね」と言ってバイバイする。

今回は子ども達とゲームをするという流れで人形を使用した。

日時：2016年11月16日（水）13:50～

実践内容と感想：

学生：「ジャッキーがお昼寝中だから、みんなで起こしてあげよう」と言う。

子ども：「ジャッキー起きて」と叫ぶ。

人形：登場して挨拶をし、「お使いを一人でしたことあるか」など聞く。

学生：「はじめてのおつかい」の絵本を読む。

人形が話すと子ども達がこちらを見て聞いてくれるが、人形が話していると気づくまでは、どんな言葉掛けをしても振り向かせることができなかったのは今後の課題である。(v)人形を持って走り回るような動きをするなど、もっと人形の魅力を活用していきたい。

日時：2016年11月17日（木）12:45～

実践内容と感想：

人形：廊下から登場して、挨拶をして好きな食べ物の話をする。

人形：子ども達と好きな食べ物についての会話をする。

学生：「クッキーだあいすき」を読む。

今回は登場する場所を変えた。内容だけでなく、登場や退場を工夫することで、もっと子ども達の興味を引くことができるようになると思う。(w)

日時：2016年11月18日（金）13:30～

実践内容と感想：

学生：人形と自分からみんなにプレゼントがあると話す。

人形：名前を呼んだら一人ずつ取りに来て欲しいと伝え、名前を呼ぶ。

子ども：一人ずつ取りに来て、ジャッキーと握手する。

今回は、一人ずつ人形に触れることができるようにした。子ども達は「頭を噛んで」「手を噛んで」などリクエストをしたり、「ジャッキーも先生も忘れない」と声を掛けてくれたり、子ども達の印象に残ることができて良かった。やはり人形が持つ魅力はすごく大きくて、子ども達は人形が大好きだと実感できた。(x)保育の現場に出たときに実際に使うことができるアイテムとして、今回の経験を大切にしたい。(y)

事例4は、実習の最初に人形を子ども達に紹介したことにより、(o)のように人形の効果に気づき、その後6日間にわたり人形を使用し続けた実践である。

1日目に、子どもに対する人形の効果を知ると同時に、(p)のように人形操作において声色を変える必要性を感じている。2日目に、1日目の課題を実践しているが、結果は(q)のとおりである。それにより、(r)のように練習をしないといけないという人形操作に対する意欲が生まれている。3日目には、事例2の学生と同様に子ども達の内言を引き出すことができおり、(s)のように人形を介して子どもとのコミュニケーションが取れるようになってきている。また、人形の動きという次の課題を発見している。4日目は、(u)のように人形と子どもの関わりに変化をつけることに挑戦している。5日目には、(v)のような課題を発見し、人形の魅力を活用して、子どもの意識を向けるにはどうしたらよいか模索しようとしている。6日目には、人形が登場する場所を変化させており、(w)で書いているように人形操作だけでなく人形を扱う空間に対する気づきが生まれている。7日目には、(x)のように子どもに対する人形の効果の大きさを実感できている。

事例4の学生は、繰り返し人形を使うことで課題を発見し、その課題を克服するための努力をした。また、最後には(y)のように、この経験を今後の保育に生かそうという意欲を持つことができた。

図2からわかるように、幼稚園実習において人形を使った実践をすることによって、人形の効果を実感できたとする学生は89%であり、実感できなかった学生は11%である。実感できなかった学生のほとんどは、事例3の学生と同様に初めての实習で緊張したため、人形を思うように扱えなかったと述べている。

学生が人形を使った実践に対する保育者の感想は、図3のとおりであり、「とても良かった」「良かった」とする保育者は68%である。「良くなかった」とする保育者は1%であり、「人形を使って何を伝えたいのか、考えてから行うこと」「人形の登場の仕方など、使い方を考えるべき」と述べている。これは、人形の操作について十分な学修ができていなかったためであると考えられる。図3の結果から、保育者は学生が人形を使った実践を行うことは有意義であると考えていることが明らかとなった。

3. 総合考察

人形劇は児童のための文化芸術として扱われてきた。そのため、多くの人形劇が子どもを対象にして

■効果を実感できた ■実感できなかった

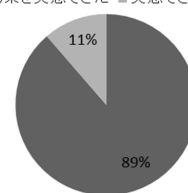


図2 人形を使った実践

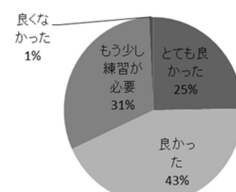


図3 学生が人形を使った実践の保育者の感想

創作されており、保育園・幼稚園等で実践されることが多いのである。

米谷ら(2008)⁶⁾は「保育者養成大学の授業に人形劇を導入することの意味は、単に学生が保育者となった際に幼児教育・保育の現場で人形や人形劇を通して保育したり、子どもたちとかかわったりするためだけではない。丹下氏から人形劇の指導を受けた学生が示したように、さまざまな気づきを得、そこから一人の人間として成長する。さらに子どもに人形劇を観せようと工夫・研鑽する学生の感受性と状況対応力、すなわち、基本的なコミュニケーション能力を高めると考える」と述べている。

本研究の調査によって、保育者は、保育において人形を使用することは有意義であると考えていることが明らかになった。

本研究の調査によって、学生が子どもに対して人形を使った保育実践を実施したことにより、学生は子どもが人形に対して興味を抱く様子や人形が子どもに対して与える影響を具体的に理解することができた。それにより、学生は人形の効果を実感し、人形操作が未熟であるがゆえに、人形の効果を子ども達に伝えるためには、「役に成り切る」「声色を変える」「人形の動きを大きくする」「子どもの反応を見ながら進める」「練習をする」など、人形を扱うにあたって必要なことについての気づきを得た。

この実践により学生はスキルアップに必要な具体的内容について気づくことができた。つまり、実習における人形を使用した実践は有意義であることが明らかになった。

IV. おわりに

本研究により、たとえ人形操作が未熟であっても、学生が子どもの前で人形を使った保育実践を行うことは、人形に対する子どもたちの反応を知り、子どもに対する人形の効果や魅力を実感し、学生の保育実践力のスキルアップにつながるということが明らかになった。

学生が人形の効果を理解した上で、田中ら(2017)⁷⁾が「保育士に求められる資質能力の基盤としてのグレード・スタンダードに関するモデル構築」の中で述べている児童文化(人形劇)のスタンダード項目を基に、人形操作技術や子どもの発達を理解した上での人形の表現について教授しながら保育者養成校における人形劇制作を行い、この実践により得た経験が人形劇制作にどの様に活かされたのか、人形劇制作をとおして保育で人形を使用する意義がどの様に捉えられたのかについて明らかにすることが今後の課題である。

注・文献

- 1) 齊藤尚子(1989):「保育における人形劇の史的検討-1. 保育に人形劇を導入した倉橋惣三-」, 東京家政大学研究紀要, 第29集, 63-69.
- 2) 金城久美子(2009):「倉橋惣三と人形劇-幼稚園教育への導入の動機と目的に関する一考察-」, 幼児教育史研究(4), 13-27.
- 3) 熊田武司(2010):「保育士における人形劇の実践について(Ⅱ)-岐阜市内の保育士を対象にした人形劇に対する意識調査から-」, 岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要, 第42集, 69-79.
- 4) 片手遣い人形は、手袋状の人形を片手にはめて操作する。人形の頭(かしら)には人差し指、人形の両手には親指と中指または親指と小指で操作するのが一般的である。この人形を指人形と呼び分類することもあるが、指人形とは指のみで操作する小さな人形として別に分類される。
- 5) 表情人形とは、人形の頭に手を入れることにより内側から人形を動かし、口を動かしたり、顔の表情などを変化させたりすることができ、人形の手に操作棒をつけた手遣い人形である。
- 6) 米谷淳、棚橋美代子、向平知絵(2008):「保育者養成における人形劇の活用-丹下進の人形劇指導-」, 京都女子大学発達教育学部紀要(4), 29-39.
- 7) 田中亨胤、内藤譲、齋藤正人、長川慶、熊田武司、山下晋、渡部努(2017):「保育士に求められる資質能力の基盤としてのグレード・スタンダードに関するモデル構築」, 平成28年度全国保育士養成協議会ブロック研究助成研究報告書, 25-27.